



滋賀県立図書館で外国語の絵本を楽しむ松井眞士さん・愛実さんとポルトガル語教師のルス・フジワラ・マルセラ先生。一般的に親世代ではポルトガル語の読み書きはできるが日本語の読み書きが難しく、子世代は日本語の読み書きはできるが、ポルトガル語の読み書きが難しいという中、県立図書館の外国語絵本が、役立っているという。眞士さんの夢はサッカー選手、愛実さんの夢は陸上選手だ。



昨年10月7日、昭和30年代の干拓で失われた湿地とその植生の再生を目指して、奄美大島・宇検村で行われた植樹の様子。マングローブの苗100本は、地元・田検小の3、4年生（21人）が1人5本ずつ種から育ててきたもの。マングローブは単位面積あたりのCO2吸収量が多く、低炭素・脱炭素時代に注目されている植物でもある。

多様な夢を次世代につなぐ

1世紀半以上の歴史を持ち、世界62カ国に拠点のある伊藤忠商事は、衣食住、インフラなどさまざまな側面から社会を支える。SDGsにも通じる「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」を企業理念とするだけに、自社の利益だけではなく世の中を「善き循環」でつなぐと、地域貢献や次世代育成にも積極的に取り組む。

昨年12月には、創業の地・滋賀県に外国語の絵本を寄贈した。琵琶湖周辺には豊富な水源と都市部への好アクセスから、工場が集積し、外国籍の方が3万人以上在住している。だが「外国にルーツのある子どもたちが楽しめる、外国語の絵本が図書館に足りていなかったのです」と、サステナビリティ推進部の山下綾美さんは振り返る。

求める子どもたちがいる。しかし何十カ国もの言葉で、子どもたちにぴったりの絵本を探すことは図書館単独では難しい。そんな状況を知り、伊藤忠商事は協力できることを考えた。「イギリス、ブラジル、クウェート、中国……。世界中の拠点に相談したところ、賛同するスタッフが現地の絵本を集めて送ってくれました。中には、現地スタッフのお子さんたちが自分たちのお小遣いを集めて買った本も含まれます」。22カ国から18言語326冊。世界中の思いが繋がった絵本が滋賀県立図書館に寄贈され、子どもたちへの“クリスマスプレゼント”となったのだ。各国のスタッフが厳選して集めたことで、日本には見られない現地の古典から最新作まで、子どもたちの求める絵本を届けることができた。

同社の公益財団である伊藤忠記念財団はこれまでも、1970年代から各地への図書の寄贈を行ってきた。入院中の子どもへの読書支援や、読むことに困難がある人も利用しやすいデジタル図書に絵本や図書を編集しての配布など、時代に合わせて青少年育成の輪をつなぐ。

「善き循環」づくりには、地域の環境保全もある。昨秋には世界自然遺産・奄美大島で、地元自治体（鹿児島県宇検村）と連携してマングローブの植樹を行った。植樹は今後も継続して行われる予定で、2022年度は、同社の本社に近い東京・青山小の子どもたちが育てたマングローブの苗も、奄美大島・田検小の生徒にバトンされ、島のみどりを豊かにしていく。

希望の苗が伸び、より良い未来へとつないでいく。



伊藤忠商事は1858年に現在の滋賀県犬上郡豊郷町で創業しました。創業者の歩みはこちらから。
毎日新聞ニュースサイト「社史に人あり」